

子どもは未来をつかみたい

2011年度 活動ダイジェスト 2012年度 事業計画

目次

ラオスの子どもたちの状況	1
2011年度 事業報告	2
2011年度 会計報告	8
2012年度 事業計画	9



ラオスの子どもたちの状況

機会を得る子どもたち、取り残される子どもたち

伸びる就学率

2015年までに初等教育を完全普及させるという国際社会が掲げる目標のもと、ラオスにも外国などから多額の援助が投入されています。1991年には59%だった純就学率(学齢に対応した就学)は2010年には94%に伸びるなど改善が図られる一方で、新たな問題を生じ、子どもたちの将来に様々な影を落としています。

広がる地域格差

私たちは首都ヴィエンチャンで子ども図書館を運営し、また全国の学校を巡回するなかで、地域格差の拡大を目の当たりにしています。

ある公立小学校は児童が減って2階部分を閉鎖し、その真横で私立校が増築工事をしているといった光景も見られます。経済の成長とともにヴィエンチャンでは保護者の教育熱が急速に高まり、公立校よりも質が良いとされる私立学校が急増しています。首都は経済力のある家庭が多いこともありますが、無理をしてでも私立校に通わせる親が増え、今や小学生の3人に1人が私立に通っています。

地方では様相は一変します。北部シェンクワン県の中学高校では、自宅から遠くて通学できない生徒たちが粗末な木造の小屋を寮にし、30人がすし詰め状態になって、自宅から持参したもち米を水だけで食べていました。3～4月は暑くて眠れず、教室に移動して眠るか、ただ泣き出す生徒もいます。かと思えば12～1月は標高の高さから気温が零度近くまで下が

るにもかかわらず暖房なしで寝泊まりしていました。従来からラオスが抱える教育状況が変わらず続いているのです。

読み書きの習得とともに、探求心、自信を育むために社会の急激な変化は、子どもたちに何をもたらしているのでしょうか。

近年、ヴィエンチャンでは中学生以上(学校によっては小学生も)のほとんどが、正規の授業時間外の放課後や休日に追加の授業を受けています。担任の先生による塾のようなもので、生徒は先生にお金を払います。出席すれば得点として加算されますし、この授業で学習内容が進んでしまうので、後れをとらないために受講せざるを得ません。

また学年末の進級試験では、ヴィエンチャンの中学校で教員と生徒間のカンニングシートの売買や不正行為が常態化し、モラルの維持が危うくなっています。副収入なくしては生活していけない給料の低さが背景にあり、政府は教員のモチベーションの向上を図って、2012年10月に給与の改訂や新しい評価方法を導入しています。

首都以外の地域では、読み書きを身につけることなく教育を受ける機会を失う子どもは未だに少なくありません。学校教育の質の向上、そして学校外でも好奇心や探求心のままに伸び伸びと学び、遊び、失敗や成功体験を積み重ね、自信と自尊心を持った人間にだれもが成長していける環境作りが必要です。

ラオス全国小学校の就学率の推移

年度	純就学率 (%)		
	計	女子	男子
1991/92	59		
1995/96		65	72
1999/00		74.2	80.3
2000/01	80		
2004/05		76.9	80.8
2005/06	84		
2006/07	86.4	84.5	88.1
2008/09	91.6		
2009/10	92.7		
2010/11	94.1	93.3	94.9

全児童数の純就学率 2011-2012

ヴィエンチャン	99.4%
ボンサリー県	86.0%

残存率(全学年平均) 2011-2012

ヴィエンチャン	88.1%
サラワン県	41.5%

中学校純就学率 2011-2012

中学校(中1-4)	64.7%
高校(中5-7)	34.7%

(出典) 教育省統計情報センター (2010/11年度は、Annual School Census 2010-2011)

純就学率: 教育を受けるべき年齢に、実際に教育を受けている人の割合

「ラオスのこども」とは？

はじめに

1982年、ベトナム戦争後の長引く混乱と停滞の中、東京在住のラオス人と日本の友人とが、「ラオスの子どもたちも日本の子どもたちと同じように絵本を楽しんでほしい」と幼稚園のバザーなどで集めた絵本をラオスに送りました。これが「ラオスのこども」の活動の始まりです。

足どり・活動の柱

本も書店も図書館もほとんどなく、読書をする人も少ないラオスでは、多くの先生にとって、絵本は初めて出会うものです。1990年代に入り、会はラオス語の絵本出版を開始。あわせて、子どもと本をつなぐ先生のトレーニングなど読書の推進普及に力を注ぎました。また、学校では音楽、図工、体育や部活動が行われていないことから、そうした活動ができる児童館のような「子どもセンター」を各地で開設支援しています。

めざすもの——子どもは未来をつかみたい

「ラオスのこども」の活動の目的は、子どもが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択する権利を全うできる社会、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。日本、ラオスをはじめ多様な人々の参加によって、同時代を生きる地球市民としてともに成長していくことをめざします。

今年度の取り組み、成果

当会は読書推進活動の拠点として、学校に焦点をあてています。今年度は、教育現場での読書活動を県・郡の教育行政機関が力強く支えるしくみづくりに注力。権限移譲などによって、担当官が意欲を高めています。

出版では、自然をテーマにした絵本、古典文学、学校図書館運営マニュアルなど多彩な書籍を発刊しました。

学校外で子ども同士様々な活動ができる「子どもセンター」は、資金集めが厳しく、困難が続いていました。しかし職員の強い意欲のもと、運営能力とプログラム企画能力向上のための研修の準備に取り組みました。



2011年度 活動ダイジェスト (2011年7月～2012年6月)

ラオスでのプロジェクト

I. 本に出会い、親しむ(読書推進活動).....p3

- 4県9小中学校に図書室をオープン
- 先生が授業でもっと本を活用するための研修を実施
- 自主的に図書活動を運営するしくみをスタート
- ラオス事務所併設こども図書館の運営・イベントを開催

II. 本をつくる(出版プロジェクト).....p4

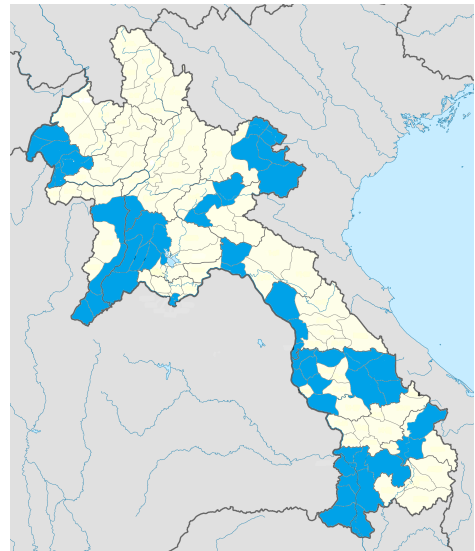
- 図書12作品、紙芝居1作品、約4万部をラオスで出版

III. 集い、表現し、学び合う(子どもセンター).....p5

- 8つの子どもセンターで、17プログラム(講座)をサポート
- 「子どもブックフェスティバル」をヴィエンチャンで開催

日本での活動.....p6

- イベント開催:ラオスの正月「ピーマイパーティ」、ラオスの織物展、勉強会、「絵本カフェ」イベント、駐在員活動報告会、スタディツアー
- 小・中・高校・大学に、開発教育(国際理解教育)の授業を出前



プロジェクト活動地
12県 60郡

Ⅰ 本に出会い、親しむ（読書推進活動）

ラオスの小学校では、教科書が1人1冊そろわない地域が多く、学校で読み書きを習っても、学校を離れると、日常で文字にふれる機会がなく、やがて読み書きを忘れるという状況が続いてきました。多民族、多言語社会でありながら、授業はラオ語で行われるということも、読み書きの習得のハードルとなってきました。

当会では、ラオス国立図書館、教育スポーツ省、県・郡教育局と連携し、1992年から約3,000校に図書を配付、220校に図書室を開設し、読書習慣の普及を図っています。

子どもと本をつなぐ役割を担うのが先生です。しかし、読書習慣を持たず、本に関心を向けない、給与が安く、農業などとの兼業で教育へのモチベーションが高くない、といった例は少なくありません。そのため当会は、先生が本に関心を高めるよう、多方面からアプローチをしています。

4 県 9 小中学校に図書室をオープン

空き教室などを利用した図書室開設を、今年度は4県9か所の学校で行い、あわせて先生向けの研修を実施しました。また、2007年以前に開設した5校、2008年以降に開設した36校に図書を補充、訪問、運営アドバイスをしました。既設校へのこうしたフォローは先生方の意欲向上にとても重要です。

先生が授業でもっと本を活用するための研修

絵本をもとに劇を演じるなど授業に絵本を取り入れ、子どもの学ぶ力を高めることを目指し、3県34の図書室設置校で研修を行いました。研修を通して先生方が抱える課題を当会が直接把握できることで、次なる施策立案に役立てることもできます。



（小中学校における図書活用強化事業・第1期／日本NGO連携無償資金協力事業）

自主的に図書活動を運営するしくみをスタート

30校の教員と、その郡の教育指導官を図書活動の担い手として育成し、3郡の教育局に、図書活動の運営を担う「読書推進センター」を発足しました。ヴィエンチ

ャン県で既に開設していたセンターでは、地域の図書活動を活気づけ、担当者がやりがいを感じるよう、権限移譲・機能強化を図りました。その結果、対象校では開始時に比べ、図書利用者数は3倍強に、貸出利用者数は2倍に増加するという成果が得られました。（読書推進運動の自立的運営の定着化事業／JICA草の根技術協力事業）

事務所併設こども図書館の運営・イベント開催

事務所併設こども図書館は平日と土曜に開館し、近隣の中学2校、小学4校の子ども達を中心に、通常時は週に約370人、夏休みには約170人が来館します。会員数は1,383人。ミステリーの読み聞かせや私立校に協力して中高生が本に触れる機会を提供するなど、読書を楽しみ、味わうための働きかけのほか、デイキャンプも実施しています。利用者の高校生は、小説コンテストで入賞しました。



先生の声

ボケオ県のカム（クム）族の児童が多く通う小学校では、校長先生が「子どもたちはラオ語を敬遠していたけれど、絵本に親しむようになって、ラオ語への苦手意識がなくなり、正しいラオ語が書けるようになってきました」と図書活動の効果を語っていました。

図書利用が活発な学校

図書利用が大きく伸びた学校には共通点がありました。

- ① 校長が図書活動に理解を示し、リーダーシップを発揮。図書担当に適切な先生を配置している。
- ② 図書担当の先生が1人だけでは孤立しがちになるが、多くの先生・生徒が関わると活発になる。
- ③ 図書室がなくても、教室で閲覧や貸出しをする「教室文庫」を実践することに先生たちが協力する

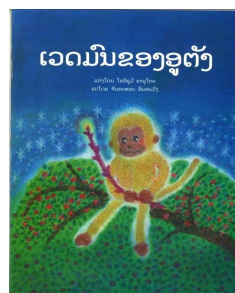
II 本をつくる（出版プロジェクト）

ラオスでは、首都でも書店がほとんど見当たらず、本を目にしません。子どもたちが本に親しむには、ラオス語で書かれた作品が不可欠ということで、会は1990年から絵本を中心にラオスでの出版を手がけてきました。作家がほとんどいない中、日本人、タイ人の専門家による絵本作りセミナーを絵心のある教員、学生などに呼びかけて開いたり、コンクールを通して作家を発掘、育成し、これまで189点814,055部の書籍や紙芝居を出版しています。

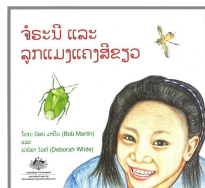
近年は消費社会化が進み、ファッションや流行情報を発信する雑誌も登場し、出版を取り巻く状況は急速に変化しつつあります。子ども向けの書籍は、NGOや援助機関による無償配布が前提となっていることもあり、質の向上が課題です。会は「子どもの心に灯をともし」ような、質の高い本作りを目指しています。

出版、紙芝居、約4万部を出版

今年度は、図書12作品、紙芝居1作品、計39,800部を出版しました。うち、以下が新刊6作品、改訂版1作品です。



ウータンの魔法
3,000部
文(絵)ほいずみはるこ
訳)チャンタソン インタヴォン



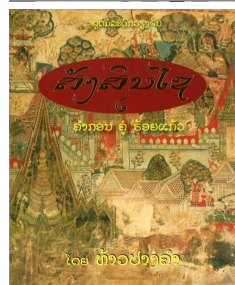
ジョラニーとアオカメムシ
3,000部
文)ボブ マーティン 絵)デボラ ホワイト
訳)ダラー カンラヤー 他1名



デクノイラオ短編集
4,450部
文)読書推進雑誌編集部
絵)マノラック カムヴォーン



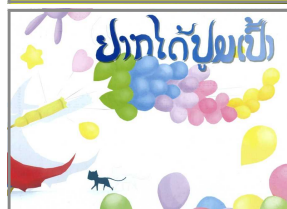
学校図書館運営マニュアル
2,000部
文)ダラー カンラヤー 他2名
絵)センスリー カティアサック他2名



サンシンサイII
1,050部
作)パンカム



タタと魔法使い
5,200部
文)小嶋 真規子 絵)山本 恵美子
訳)チャンタソン インタヴォン



ふうせんがほしい
2,000部
文)ヤーンナヴッティ ジャンタランシー
絵)セーンスリー カティアサック

以下が、再版6作品です。

作品名	作者名	出版数
カンパーとピーノイ (孤児と小さいお化け)	文)ドゥアンドアン ブンヤヴォン 絵)ヴォンサワン ダムロンスック	2,100部
カンパーとナンガー (孤児と象牙娘)	文)ドゥアンドアン ブンヤヴォン 絵)ヴォンサワン ダムロンスック	4,550部
たのしい動物の話	文)フィリップ ギブソン 絵)サロンサイ ペッドゥアンカム 訳)ダラヴォン カンラヤー	1,450部
おほしまきらきら ～文字絵本第3巻～	文)ドゥアンドアン ブンヤヴォン 絵)ドゥアンチャン ベンマニー他	3,000部
カンパーと歌うジャコウネコ	再話)ダーリヴォン シッパサイ 絵)ヴォンサワン ダムロンスック	3,000部
ぼくはどこへいくの	文)森 透 絵)やべ みつのり 訳)チャンタソン インタヴォン	5,000部

主な支援者:MP研究会、学習院女子大学、キヤノン株式会社、自治労西東京市職員労働組合、すかいらくグループ、学校法人平山学園清林館高等学校、Australian Government for International Agricultural Research、NGO連携無償資金協力事業、草の根技術協力事業、自己資金(指定募金)

Ⅲ 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）

ラオスの学校は、座学による暗記中心で、音楽、図工、体育はカリキュラムはありますが、指導できる先生がいない、用具がないなどで、子どもたちの情操面を伸ばしたり、チームでの活動をする機会がほとんどありません。

1994年に、当会などの協力によって音楽、舞踊、図画工作などの表現活動ができるラオス初の子ども施設として、情報文化省による「子ども文化センター」が開設されました。その後、全都県に設置されましたが、講師の雇用、教材費、行事開催などの資金確保が難しく、魅力的なプログラムが組めず、近年、都会の子どもたちはインターネットゲームショップに夢中になるなど、不活発な状態が続いてきました。

当会においても日本から支援は、緊急性が低いと判断されるなど理解を得ることが難しく、支援するセンターの絞り込みに踏み切らざるを得ませんでした。

プログラム支援

今年度は8か所の子どもセンターにおいて、合計17プログラムの講師料・教材費を支援しました。

当会スタッフが各センターを訪問し、活動状況の調査、運営アドバイスをを行う中で、センター職員は、新しいアクティビティを実施するための技術・ノウハウを修得したいとの要請が相次ぎました。次年度には活動活性化のための研修ワークショップを実施する計画です。

＜支援プログラム＞

- ・ケオクーCEC・・・「劇」「伝統音楽」
- ・サイヤブリCEC・・・「絵画」「作文・詩を書く」
- ・ボーテンCEC・・・「サンシンサイ朗読・劇」「読み聞かせ」
- ・ケンタオCEC・・・「サンシンサイ朗読・劇」「絵画」
- ・パクライCEC・・・「絵画」「伝統音楽」
- ・ヴィエンチャンCEC・・・「合唱」「ラオス舞踊」
- ・シーサタナークCCC・・・「英語とゲーム」「絵画・工作」



・ボリカムサイCCC・・・「劇」「ラオス舞踊」「彫刻・絵画」

＊サンシンサイとは、ラオスの古典の叙事詩です。

CEC:教育開発センター

CCC:子ども文化センター

子どもブックフェスティバル開催

児童生徒から一般市民まで、広い層が読書の楽しみに触れられことを目的として、ヴィエンチャン都教育局主催、当会共催で「第8回子どもブックフェスティバル」を2月に2日間実施しました。ヴィエンチャン都内42の小中高校の子ども達や先生、保護者、約1,100人が来場しました。

学校図書室を開設する38校が、読みきかせや詩の朗読コンテストに参加。各校からの参加は15人を定員としていましたが、日ごろの図書活動の成果を披露しようと140人の生徒を連れて参加した学校もありました。新聞やラジオ、テレビ、フェイスブックなどを通じ、新たな対象に向けて広報することができました。



子どもの声

- 「子どもセンターは、いろいろな学校の子と友だちになれるのがいいです」
- 「大好きな踊りができてうれしい。ラオス人として、踊れるようになることは大切なことです」
- 「サンシンサイの詩は長いけれど覚えちゃった。学校の勉強は、こうはいかないけれど・・・」
- 「みんなでいっしょに作り上げるのが、すごく楽しい」

先生の声（ヴィエンチャン子どもセンターのトンバイ館長）

「私自身、学校の教員だったときは、生徒の成績のことばかり気になっていました。センターの職員になって、子どもが自分の意見を言えるようになること、友だちとのコミュニケーション力をつけることの重要性に気づかされました。私の同僚の息子もセンターで皆と活動するようになって、人間的にとっても成長したと喜んでいました。」

日本での活動

当会は、日本では東京に事務所を設け、活動を広く知らせ、ご支援、参加の呼びかけなどを行っています。また、ラオスの文化を紹介する、どなたでも参加できるイベントや、学校に出向いて国際理解教育の参加型プログラムも実施しています。いずれのイベントもボランティアの仲間とともに作り上げています。

イベント開催

●ラオスの正月「ピーマイパーティ」

ラオスは4月にお正月がやってきます。当会では毎年、東京・大田区内の施設でラオス料理、民族舞踊などラオス色満載のパーティを開催し、広く一般の方の好評を得ています。今年度は160人が新年を祝いました。



●ラオスの織物展

ラオスの様々な民族の織物、刺繍を使った小物や洋服の展示販売を、各地のギャラリーなどの協力を得て開催しています。今年度は、2回開催しました。

●勉強会

ボランティアの勉強会チームが中心になって、ラオスの文化や現地事情、食べ物、絵本など会の活動にちなんだテーマで、講演、料理教室などを行っています。ラオスからの留学生との交流の機会が得られることも、人気を呼んでいます。今年度は、5回開催しました。



第8回「ラオススィーツ一緒に作って食べて留学生の声を聞いてみよう！」

第9回「ラオスの絵本カフェ」

第10回「幻の布ラオス手織りの美」

第11回「ラオスを知ろう・食べよう！」

第12回「ラオス人と日本人違うところと同じところ」

●「絵本カフェ」イベント

ラオス・テイストのお茶菓子を食べながらラオスについてのお話と、日本の絵本にラオス語訳のシートを貼ってラオスに送るイベントを開催し、子どもから大人まで参加を得ました。

●駐在員活動報告会

ラオス事務所に駐在するスタッフによる報告会を開催しました。子どもが絵本と出会うときの表情や、学校図書室運営の苦労話など、現地のホットな話題を伝えました。

●スタディツアー

織物の里を訪れるというテーマで、一般から参加者を募集してラオスへのツアーを行いました。



た。小学校への訪問と交流も楽しいひとときでした。

小・中・高校・大学に、開発教育の授業を出前

当会スタッフが学校に出向き、国際理解教育(開発教育)の参加型授業を実施しています。今年度は小学校1校、中学4校、高校4校、大学1校、計9校で、ラオスの紹介や日本の絵本にラオス語訳を貼る「ラオス語絵本」プロジェクトを実施しました。

また、昨年度に続き、大田区地域力応援基金助成事業による助成で、区内の小中高等学校6校でも実施しました。

参加した児童生徒は395人、絵本は242冊作成しラオスに送りました。



組織の運営

1. 全体運営

■会員

昨年度末の活動会員66名(内団体1)、サポーター145名(内団体9)から若干減少しました。

活動会員	66名(内新規8名)
サポーター	137名(内新規10名)

■総会

9月22日、第9期2011年度通常総会を開催し、第9期事業報告、会計報告が承認されました。

参加者 活動会員42名(書面表決、委任状を含む)、協力者3名 計45名

■理事会

理事9名、監事2名により運営され、3ヶ月毎、年4回開催。理事会では、経営や資金調達状況の報告をおこない、とりわけ読書推進の進め方に関してアドバイスを受けました。

■代表スタッフ会議

月1回、共同代表、事務局長、スタッフにより開催され、運営業務に関する意思決定をおこないました。

■活動ミーティング

ボランティア、会員が集まる活動ミーティングは、計6回開催。参加者は78名と、昨年より増加しました。



2. 東京事務所

■体制

昨年に引き続き、4名により運営されています。

常勤非専従事務局長	1名
常勤専従スタッフ	3名

■資金調達

資金調達に厳しい状態が続き、強化を図っていますが、なかなか成果につながっていません。当会は認定NPOとなりましたが、寄付金控除についての広報がまだ十分とはいえない状態です。今年度より、オンラインカード決済を導入し、19名の利用がありました。

■ボランティア・インターン

毎週金曜日にギャラリー木場をオープンし、ボランティアが常駐しています。出版事業について、

専門知識のあるボランティアの協力を得ました。

3. ラオス事務所

■体制

常勤スタッフ10名により運営しました。

事務所所長	1名
常勤専従スタッフ	8名
日本人駐在員	1名
アドバイザー	1名

10月から2名の若手スタッフが加わり、地方出張に出られる人員が増えたことで、昨年度に比べ、事務所長が事務所を長期間空けることは少なくなりました。地方出張や、研修、イベントの実施毎に報告書を担当スタッフが報告書を作成しています。

外部のセミナーに、積極的にスタッフを派遣し、能力の向上と、スタッフが視野を広げ他団体と情報交換する機会を作りました。

■資金調達

出版費用やブックフェスティバル開催費用の一部を調達することができました。ワークショップにも参加し、ラオスから世界へ情報発信し、資金調達する方法について情報を収集しましたが、実際の活用には至っていません。

図書販売は、委託販売先の増加によって販売数拡大につながりました。

■ボランティア・インターン

スウェーデンのボランティア受け入れ団体を通じて、短期ボランティアを受け入れ、英文ホームページの改善や、スタッフ向けの英会話講座を実施するなど、活動への協力を得ました。今期はラオス人インターンの受け入れはなかったが、ブックフェスティバルや当会図書館でのイベントの実施の際は、協力団体「仏教開発プロジェクト(Buddhism Development Project)」からボランティアのサポートを得ることができました。

日本人インターンは、学習院女子大学の研修プログラムを通し、4名の学生を8月に受け入れました。



2011年度 会計説明

活動の透明化を一層高めるため、新しく完成したNPO会計基準に沿った会計システムでの会計処理に当期より変更しました。

大きな違いは2点です。前期までは「収支計算書」という形式で、事業毎の科目分けをしていましたが、今期より「活動計算書」になり、科目分けの方法が変更になりました。これには、「当期収支差額」がなくなり、「当期正味財産増減額」が計上されています。この金額には、棚卸資産が含まれています。

また、当期は期末の前受助成金を計上しましたが、前期は前受助成金2,052,880円を計上していませんでした。そのため当期の受取助成金には前期の継続事業分の受取助成金が計上されず、結果計上収益額が少なくなりました。前期分の前受助成金を今期に計上したとすると、当期正味財産増減額は△1,785,462円となります。なお、正味財産には棚卸資産が入っているため、当期正味財産増減額は収支差額とは異なります。前受助成金の計上を考えないで収入全額を計上した場合(前期までと同様の計算方法)での当期収支差額は△418,864円となります。

財政の立て直しが、今期の第一の重点目標であり、収入全体では若干の回復がみられました。達成度は、科目により大きな違いがあり、一般寄付や事業収益は予算額を達成することができましたが、会費収入、指定募金は、前年比予算比共に減少しました。特に、指定募金については、メニューの提示の仕方を改良してきたものの、大幅な減収となってしまう、原因の分析が早急に必要です。プロジェクト援助に関しては、民間財団への助成金申請が少しずつ採択されるようになり、企業・団体からの援助は、図書出版事業への支援が増加し、前年に比べるとどちらも増加しました。また、専門ボランティアによる経営アドバイスを受け、業務全体のバランスの修正をおこないました。

【矢崎監事からのコメント抜粋】

監査を実施した際、下記の事項について、今後早急に改善されることを望みます。

1. 昨年に比べて収入は増加しているが、会費や寄付の収入が減少している。管理費を会費や一般寄付で賄えると安定してくる。継続して事業を実施するためにも、安定的な資金調達を検討する必要がある。
2. 情報の共有を進めた結果、会計処理がスムーズになったのはよい。ただ1点、現金の管理について、ほかの人がみてもわかるように、書類を整えておくべき。
3. 今期より、NPO法人会計基準を取り入れ、導入初年度のため、今期の、正味財産増減額が大きくマイナスになっている。とはいえ、前期からのずれを考慮しても、マイナスであることから、健全な運営をすることが望まれる。

活動計算書

科 目	金 額
I 経常収益	
1.受取会費	958,000
2.受取寄付金	4,989,934
3.受取助成金等	16,772,320
4.事業収益	8,347,024
5.その他収益	292,318
経常収益計	31,268,596
II 経常費用	
1.事業費	
(1)人件費	9,120,736
(2)その他経費	18,531,111
事業費計	27,651,847
2.管理費	
(1)人件費	4,801,999
(2)その他経費	2,653,092
管理費計	7,455,091
経常費用計	35,106,938
税引前当期正味財産増減額	-3,838,342
法人税等	70,000
当期正味財産増減額	-3,908,342
前期繰越正味財産額	15,704,576
次期繰越正味財産額	11,796,234

貸借対照表

科 目	金 額
I 資産の部	
1.流動資産	16,626,747
資産合計	16,626,747
II 負債の部	
1.流動負債	4,830,513
負債合計	4,830,513
III 正味財産の部	
前期繰越正味財産	15,704,576
当期正味財産増減額	-3,908,342
正味財産合計	11,796,234
負債及び正味財産合計	16,626,747

【脇田監事からのコメント抜粋】

2011年度の組織運営については、基本的に問題はない。

決算書に関しては、NPO法人会計に移行し、活動計算書にダイレクトに反映されるようになったため、フローもストックもすべて見えるようになった

財政面は厳しい状況が続いているが、資金繰りの谷間に遭遇したような場合に備え、平均支出の3ヶ月分はストックし、収入はななくとも繰越金で対応できるような組み立てが必要である。

事業別損益の状況

科 目	経常収益計	経常費用計
出版事業	2,714,786	3,122,766
図書活用強化事業	6,917,551	6,917,551
自立運営強化事業	5,625,394	5,262,774
図書館事業	635,000	5,232,231
子どもセンター事業	233,387	653,199
特別実施事業	583,202	385,636
交流事業	5,375,498	4,460,031
収益事業	3,460,085	2,374,196
図書商品棚卸	0	-756,537
事業部門計	25,544,903	27,651,847
東京管理費	4,998,136	6,798,290
ラオス管理費	725,557	656,801
管理部門計	5,723,693	7,455,091
合 計	31,268,596	35,106,938



2012年度事業計画 第11期 2012年7月1日～2013年6月30日

□背景と方向性

現在進行している第5次中期計画で、私たちは活動の「現地化」を推進するため、自発的な活動の担い手を様々なレベルで育成する方針を定めました。今期もその方向性にのっとり、プロジェクトにおいて、これまでの「学校」を拠点とする読書推進活動の枠を越え、読書推進の担い手が広がり、読書が地域に定着することを目指した活動を具体化します。今期はその第一歩として、学校の保護者を巻き込んだ活動を計画。この活動は私たちにとって初めての内容を含むものであり、評価と改善を図りながら、成果を上げることを目指します。

この数年、広報の切り口の工夫、会員、理解者、支援者の拡大や物販事業の強化などにより、組織力の改善を重点項目として取り組んできました。しかし、十分な成果となっておりません。NGOの活動は、ラオスという活動地だけでなく、それを支える日本において、多くの理解者、支援者を得、相互交流がおきるなかで運動体としての意味を持ててきます。この点を再度深く認識し、「伝えたいこと」の発信から、「知りたいこと」を伝える努力をより続けることで、会員、理解者、支援者を増やし、経営の安定を達成することが、今年の一歩の重点項目となります。

二番目の重点項目として、ラオス事務所の自立を目指す活動として、ラオス事務所事務局長、スタッフの能力強化研修をすすめ、スタッフが活動の全体像を常に意識しながら、組織活動ができるように目指します。同時に、東京事務所との緊密な連携ができるように、さらに情報、意識の共有化を進める必要があります。また、ラオス社会の急激な変化、それにともなう子どもたちの環境の変化に関し、常に観察し、求められている活動内容について、受け止めることができるようにします。

ラオスでのプロジェクト

I. 本に出会い、親しむ（読書推進活動）

●図書活用が活発に行われるために

カムアン、サワナケート、チャムパサック、セコーンの4県36の小中学校を対象に、図書の利用時間や貸出の増加、図書サービスの充実を図り、とくに読書活動不活発校には集中的に課題解決に取り組みます。加えて、県郡の教育指導官が各校の読書推進活動を適切に指導できるようにトレーニングします。（日本NGO連携無償資金協力）

●図書室の開設、図書の補充

9校に図書室を開設。過去3年間に開設した31校に補充図書を配布。さらに既設5校を訪問し、図書の活用法を指導します。

●学校図書室地域化事業

ルアンナムター県、ヴィエンチャン県の計6郡で、小中学校16校の教員、校長、児童生徒、保護者を対象とし、地域に根ざした図書活動を展開します。地域住民を巻き込むことで、学校の図書活動の担い手の裾野を地域に広げます。（JICA草の根技術協力事業に申請中）

●ラオス事務所併設こども図書館の活動

子どもが主体的に参加できるアクティビティ、保護者や地域を惹きつけるイベントなどを企画・実施します。また、図書活動のリーダーとなるボランティアを育成します。

II. 本をつくる（出版プロジェクト）

質の高い本作り、多様な図書の出版を目指します。出版担当スタッフを増やし、若い世代の絵本の作り手を発掘する創作物語コンテストを実施します。

III. 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）

8つの子どもセンターにプログラム支援を行います。また、子どもにとって魅力的なアクティビティを実施するため、運営能力強化の研修を実施します。

日本での活動

支援者、寄付協力者を増やすため、ホームページの充実を図るとともに、子ども、一般市民にアジア、ラオスの子どもたちの状況を伝え、生活を見つめ直す機会として喚起します。また定例の活動ミーティング・勉強会では、活動を支える人々、関心を持つ人々とのネットワークを強めていきます。

30周年記念事業として、日本向けにラオス語図書の日本語翻訳出版を行います。

組織の運営

東京事務所では、スタッフとボランティアとの共同した体制を作ります。

ラオス事務所では、ラオス事務所の中長期的な自立を意識し、体制の強化を重点項目とします。また、ラオス人の学生ボランティアが併設図書館や、学校などで図書活動を実施していけるよう、育成します。さらに、日本人のインターンを受け入れ、活動に関心のある人材にラオスでの活動協力の機会を設けます。

2012年度 予算

活動計算書

科 目	金 額
I 経常収益	
1.受取会費	1,100,000
2.受取寄付金	6,780,000
3.受取助成金等	21,705,606
4.事業収益	9,000,000
5.その他収益	350,000
計上収益計	38,935,606
II 経常費用	
1.事業費	
(1)人件費	10,829,673
(2)その他経費	17,783,475
事業費計	28,613,148
2.管理費	
(1)人件費	4,926,609
(2)その他経費	2,510,000
管理費計	7,436,609
経常費用計	36,049,757

事業別損益

科 目	経常収益計	経常費用計
出版事業	2,940,500	2,937,080
図書活用強化事業	12,275,993	12,275,993
図書室地域化事業	2,205,880	2,205,880
図書館事業	2,014,475	2,016,543
子どもセンター事業	1,324,000	1,323,482
特別実施事業	910,000	909,670
交流事業	5,150,000	4,183,400
収益事業	3,850,000	2,761,100
事業部門計	30,670,848	28,613,148
東京管理費	4,570,000	6,629,323
ラオス管理費	813,000	807,286
管理部門計	5,383,000	7,436,609
合 計	36,053,848	36,049,757

方針

財政の立て直しをし、資金調達の意識を高めます

・寄付の成果がわかりやすいよう具体的に伝えます

・ラオス関連企業、団体、機関への働きかけを強化します

(認定) 特定非営利活動法人ラオスのこども
の目的は

子どもが自らの力を伸ばす権利、人生を主体的に選択する権利を全うできるよう、教育の普及に協力することで、公正で平和な地球社会づくりに貢献することです。
そのため、今日子どもが教育を受ける機会を十分得ていない地域のひとつ、ラオスにおいて、本の出版、読書の習慣の普及、子どもが集い遊び学べる場の支援など、子ども自らが学ぶ力を伸ばす環境を生み出す活動を行います。
活動を通じて得た知識、情報は地域と地球社会に発信していきます。
活動にあたっては、子どもの参加と、日本およびラオスをはじめとした人々の参加を促し、誰もが対等に力を発揮し合う関係を作り出すことで、それぞれが成長の機会を得ることをめざします。

(定款第3条目的より)

特定非営利活動法人

ラオスのこども

Deknoylao



□東京事務所

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12,303

TEL/FAX 03-3755-1603

E-mail deknoylao@yahoo.co.jp <http://deknoylao.org>

□ラオス事務所

ACTION WITH LAO CHILDREN

Noui 4, Ban Saphangmo, Muang Saysettha,

Vientiane, LAO P.D.R. P.O.BOX 1518

TEL/FAX 856-21-41-6064

E-mail alclao@laotel.com